

昭和
四十六年

二七
月十五日

第三種郵便物
発行(毎月一回・十五日発行)

(通第二六一號)

慈

光

第二十三卷

第二号

目

次

信 行く旅人抄(三)	池山 栄吉	(1)
過犯天に弥る	福島 政雄	(7)
有縁の知識	和才誠司	(11)
信仰と科学	松本解雄	(14)
一道会の記	榎原徳草	(16)
『ただ念佛して』	花田正夫	(20)

信を行く旅人抄

(三)

池山栄吉

もあり得なかつたに違ひない。

『法然のおおせまことならば、親鸞が申すむね、またもてむなしかるべきか』

まだ岡山にいました頃、津山の手前、岡山から二時間ほどで行ける誕生寺、法然上人の誕生の地、そこへ参ったことがありました。岡山には十数年住んでおりまして、一度はと心がけていたのでしたが、機縁が熟したものですか、かねての志願を果たすことになりました。

大方の桜の花は散つたが、稀にはまだ見頃のが残つている頃で、遠近に見える桃の畠は赤く、菜種の花は黄いろく春の色の濃くただよつていて野辺を、汽車は私をのせて走つて行く。その間、私は何とも言えない靈感にしみじみとひたることが出来たのでした。私は思いました。今自分は空間的に僅か二十里たらずのところを行くだけであるが、時間的には七百余年の昔にさかのぼつて、自分の魂の源に近づきつゝある。なぜかというと、若し法然上人がお生れにならなかつたら、真宗の祖師としての親鸞聖人の出現

七百年の昔、吉水の禪房での両聖人の会見は、親鸞聖人に『よき人のおゝせをこうむりて信する』機会を得せしめた。そうでなければ、親鸞聖人をよき人と仰ぐ今日の自分も出て来ようはずがない。自分の今日あるは、ひとえに親鸞聖人のおかげであり、親鸞聖人の出現は、法然上人の誕生に依属する。信仰の流が古今一つである以上、自分のからだの誕生の明治何年であつたにせよ、心のそれは遠く七百年の昔にさかのぼる。法然上人の誕生地は、即ち、自分が誕生地である。こうして誕生寺へ行く道すがら、時處を超えた偉大なる信の上の自分を觀察することが出来たのでありました。

法然上人のほかに、もう一人、聖人が父のように崇び、母のように慕われたかたがありました。それは聖徳太子であります。

も、靈犀（れいさい）一点の相通するものがある。一つ泉から湧く同一念仏の流に掬む仲である。こうした感じの支配するのが、今人と古人とをつなぐ信仰独特の作用であつて、これこそ實に信するものにのみ恵まれる感興であり、特權である。

三、あと十年

聖人も磯長の廟へ参詣されたことがあります。それは十九歳の時で、この参詣が聖人の獲信の上に一大転機となりました。聖人の御参詣は一時の気まぐれの遊山氣分からではない。一つには、悲願弘宣の恩徳を謝するため、また一つには、出離解脱の引導を請わんがためであつたに違ない。

この時聖人に夢のお告げがありました。それによると、聖人の生命はあと十年で終わると同時に涅槃のみやこに生れるというのです。冥途（めいど）の旅の一里塚、十と数えるしかないと聞いては、めでたくもあり、めでたくもなしと感ぜられたかどうかしらないが、とにかく呑氣にしている場合でない。おそらく二十九になるまでには、成仏の準備を整えなくてはならない。「十乘三諦（さんたい）の月、觀念秋をおくり、百界千如（せんによ）の花薰修（くんしゅう）年をかさね」學問に修行に、一生懸命いそしまれたのは、さもありなんことであったのです。

太子の御廟は河内の磯長（しなが）にあるとは、かねて聞いておりましたが、住吉に住むようになつてからは、これもやはり二時間ほどで行けることになりましたので、いつか参詣したいと思っていたところ、去年の大晦日でした。丁度伴が東京から帰省していましたし、岡山からも信友が見えましたので、これ幸と急に思い立つて出かけました。その途中も、親鸞聖人が、太子を和國の教主とあがめ絶対他力の信仰を獲ざして頂いたのも、全太子のおかげである、とおよろこびになつたことや

聖徳皇のあわれみて仮智不思議の誓願に

すすめいれしめたまひてぞ住正定聚の身となれる

の和讃などを思い合わせて、誕生寺詣での際と同じような崇美な感をいだかせられました。

二、信仰のつながり

祖師にききてしのびまつらん聖太子

多々のことくに阿摩のことくに

これはその途中の感を詠んだものです。同じ偉人をしのぶにしても、その人と信仰のつながりのない偉人をしのぶのは、結局、その人のえらさをほめたり、てがらをたたえたりするだけのことですが、信仰のつながりのある人をしのぶ時は、その人の心と自分の心とが、おなじ波動の脉を打つ。いかに時代と場所、境遇と性格を異にしていようと

四、ファウストの歎

十年はたつて見れば速いものです。聖人は二十九の春を迎えたが、成仏の準備ははたしてはかどったでしようか？幸なるかな！この問題は否定されたのです。それが肯定されたなら、聖人はもはや私達の聖人ではなかつたのです。研学とは、険しい砂山を徒步でよじのぼることであります。修行とは、はげしい流れに逆つて小舟を漕ぐことでありました。いっぱい前に出たつもりでも、ある目標に目をやると依然として元の所でもがいているに過ぎない進むはおろか少しでも油断すると、忽ち後に戻つてしまふ「俺は依然たる旧阿家（きゆうあもう）だ。お利口さはもとのまんまだ、……俺達にはなんにもわかるものじやないんだ」とのファウストの歎きは、聖人の唇からもれざるを得なかつた。

出離生死のたねとして何一つ得られないとの歎きの中にたつた一つ明瞭になつたのは自分の器量の拙さであつた。『心つねに散乱して一心をうることかたし、身とこしなえに懈怠にして精進なることなし』頭燃をはらうような焦燥はありながら、本当の力精（りきしよう）を欠く自分をみつめて、つくづく「いずれの行も及び難き身」と感じられたと思う。御晩年の和讃「自力聖道の菩提心、心もことばもおよばれず、常没流転の凡愚は、いかでか発起せしむべ

忝けなさの感から、せぐりくる涙を抑えながら、二十年の求道生活のあらましを打ち明けて、こういうして見ようのない私、何一つ取柄のない私ではあります、どうぞ今日から弟子とさせて下さるようお願いしたのでありました。

八、法然上人の獲信

六十九歳の法然上人は、今若い親鸞聖人の口から、求道の熱烈さを聞かされながら、それを裏づける真剣さを、そのやつれた面、おとろえたすがたに見て取つて、さながら昔の自分を見せつけられるような気がして、うたた今昔の感にうたれながら、

「私もあなたと似た経路を辿りました。」私も九つの年に父に別れ、その遺言で剃髪し、十五の時、故山に登つてからいろいろ苦しめました。当時の仏教各宗の如きも、天台、華嚴をはじめ、真言・仏心の諸宗から法相・三論にいたるまで、それぞれ深く立入つて研究もしましたが、要するに皆仏性を悟るということを目的とするものであります、入口こそ違いますが、落ち着く先は一つなのであります。どの宗にしましても説いてる教は、幽玄高妙を極めたまことに立派なものであります、如何にせん、私共の器量が及びません。經典を学び行法を修するには私共の智力は餘りに貧弱です。何のことない、渡に船を失い、闇に道を迷つたようなもので、気

ばかりあせつても、どうすることも出来ないです。

じつとしていることも出来ないので、めげる心に鞭打ちながら、黒谷の法恩藏で一切經を五遍までひらいてみましたが駄目でした。こうした悲歎のなかから學習を続けていますうちに、宿善開発の時節が到来したといふものでしょ

うか、特に善導大師の觀經疏に目がとまり、拝讀しますと私のような十惡の凡夫が、仏に成れる道が説いてあるのに気づきました。まだ深いところはわからないながらも、なんだか嬉しくて／＼、ぞくぞくと身の毛がよだつように覚えまして、繰返し／＼三遍、都合八遍よんだのですな。

九、彼の仏願に順ずるが故に

その最後の回でした。「一心に専ら弥陀の名号を念じて行住坐臥、時節の久近を問わず、念々捨てざる、これを正定の業と名づく、彼の仏の願に順ずるが故に」とある御文を読んだ途端、忽然として大師の御心に触れることが出来ました。

あまりの嬉しさに、そばに聞いている人もないのに、私はようなしてみようのない者のために、阿弥陀仏は、救いの法を五劫思惟の昔から、ちやんときめておかれたのだった！』と大声に叫ぶと同時に、感悦體に徹り、落涙千行でやるせないかじけなさに涙がとめどなく流れました。

法然上人はこんな風に語り出して、なお教理の深い底を

き」は、この時の聖人の感じそのままでありましょう。

五、六角の精舎

「いすれの行もおよび難き身」から出る結論は一つしかありません「地獄は一定すみかぞかし」であります。人生唯一の目的を成仏にみとめた聖人が、事もあろうに地獄落と確定したとは、何という悲愴なりゆきでしよう。聖人が「あゆみを六角の精舎にはこんで百日の懇念」をされたのは、この窮屈であります。

七、吉水の会見

さて聖人は満願の日、汝の望のかなう時は今であるといふ「告げを五更（ごこう）の孤枕（こちん）に得て」、吉水の禪房に法然上人を訪ねられた。その道ながら「自分の機にかならう教を聞かせて下さるのは上人を措いて外にない、絶望のどん底から引出して下さる智識に相違ないといふ予感に勇みながら歩みを進められたことでありますよう。

何たる崇高な、凡そこの世にありうる限り莊厳な場面でしょう。このいとも静かなる会見の席で、親鸞聖人の胸裏に点火された絶対他力の心光は、七百余年をへだてる今に私どもの上に直射しつゝ、永久に限りなく、胸から胸へとうつされて行くのであります。

法然上人は快く会つてくれました。聖人は何とはなしに

説き、如來選択の願心から信心をたまわる、往生之業念仏為本、ただ念佛して弥陀のおたすけにあずかる外はないと淳々と仰せられたのであります。

十、親鸞聖人の入信

御伝鈔には、このありさまを、優雅な文で、

「建仁第一の暦春のころ、隱遁のこころざしにひかれて源空上人の吉水の禪房に尋ねまいり給いき。これ則ち、世くだり、人つたなくして、難行の小路まよい易きにより、易行の大道におもむかんとなり。真宗紹隆（しようりゆう）の大祖聖人、ことに宗の淵源をつくし、教の理致をきわめてこれをのべ給うに、たちどころに他力摂生の旨趣を受得し飽くまで凡夫直入の真心を決定しましましけり」

と、読むごとに莊重の気が惻々として身に迫るのを覚えます。聖人はこの時信仰をいただかれたのであります。教行信証にも「然るに愚癡の鸞、建仁辛酉（かのとどり）暦雜行を葉てて本願に帰す」とありますことからも明らかであります。

智慧光のちからより 本師源空あらわれて

淨土真宗をひらきつつ 選択本願のべたもう

親鸞聖人の法然上人に対する態度は、子の母を思うよう

として捨ててきた過程が、信仰を築き上げる要素としてよみがえった。

十三、よき人の仰せ

師と仰ぐよき人の一言一語が、聖人の身に沁み、體に徹り、内臓に刻まれる思いがあつたのは、もとより当然のこと

とて、聖人が「本師源空いまさば、このたびむなしくすぎなまし」と感謝しつつ、上人を或は勢至菩薩、或は弥陀仏の化身と仰がれたのも、また怪しむに足らない。

随伴する人は案内する人のうちに、先達は後進のうちに生きた。聖親鸞の持合わした煩惱罪障の氷は、聖法然の念佛無碍の光にとかされて師弟一味の菩提の水となつた。この意味において、親鸞は法然となり、法然は親鸞となつた後年、聖人が「善信が信心も上人の御信心もひとつなり」と言われたのが信心相論のたねとなつて、結局その子細を師上人に申上げて「源空が信心も如來よりたまわりたる信心なり善信房の信心も如來よりたまわらせたまいたる信心なり。さればただひとつなり。別の信心にておわしまり」と言われたのが信心相論のたねとなつて、結局その子

さんひとは、源空がまいらんする淨土へはよもまいらせたまいまい候わじ」という判定を請うに至つたのも、よくこの間の消息をあらわした逸話であります。
歎異鈔の第二章の終りに「弥陀の本願まことにおわしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず、仏説まことにおわしまさば、善導の御釈虚言したまうべからず。善導の御釈ま

な渴仰に基礎づけられていた。今や聖人の心の内は、進展に役立つべき何物をも藏していない。二十九年の体験によつてきれいさっぱり掃除されてしまった、言葉通りの無一物であった。

願わくば恩師上人の垂示をもってこの空虚をみたしたいと、聖人の望みはこの一点に集中した。一面、よき人と仰ぐ信頼があり、他面、虛心恒懷（きよしんだんかい）先入主となる自見が存在しない限り、上人の所感は、そのまま聖人のそれとして受け入れられるのは、心理的必然の経過である。

十二、体験と告白

さて上人は、告ぐるに自己の体験を以てした。単に法文によつて教理を説くといふのでなく、むしろ信仰の告白であつた。説教は概していえば、地図を開いて目的地点を指示するようなものであるが、告白に至つては、自身がさきだちになつて案内するようなもの、聞く方にもし同様の体験があれば、歩調を合わせて案内者のあとについて行くことができる。

法然上人の体験の多くは親鸞聖人に取つてはひとことではない、わがことであつた。かつて自分の体験した、若しは現にしつつあることであつて、それはいま上人の告白を共感するになくてはならぬ資料であつた。それまでは廢物

ことならば、法然の仰せそらごとならんや、法然の仰せまことならば、親鸞が申すむね、またもてむなしかるべからず候うか」とあるのも、同一信心の告白に外ならないのです。

十三、第二章の骨子

「親鸞におきては、ただ念佛して弥陀にたすけられまいらずべしと、よき人の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」とは、聖人がこの際、師の上人の信仰と、同一鹹味（かんみ）にとけ合つた刹那の心的事実であります。聖人はおそらくその席上、不可称不可説不可思議の感に打たれて至心信楽、口をついて出る念佛に「感悦體に徹り、落涙千行」のおのれを見出されたことであろうと思うのであります。

この心的事実の告白が、第二章の骨子を形作つてゐるのあります。第二章が心的過程の記述であるならば、第一章は心的現象の観察であり、前者の主觀的、具体的、特殊的なに対し、後者は客觀的、抽象的、普遍的であります

第二章の主格は「親鸞におきては」即ち、私であり、第一章のそれは、凡そ人であります。もつとも第一章とともに空に、たとえは教文の上から割り出した原理ではない自家直接の体験を一般的に言い現わしたものであるから、実質的には同じであるが、形の上で異なつた印象を与えるのであります。

（未完）

過犯天に弥る

福島政雄

青年期の頃であつたと思う。従兄から竹田黙雷禪師の遺偈というのを聞いたことがある。それは

風繩雪井七十七年

転身回顧過犯弥天

というのである。自分の一生は風の繩で縛らうとしたり井戸を雪で埋めようとした徒労の一生であつて、我が身をぶりかえつて見れば過ちを犯したことが非常に多くて天に一ぱいになつて空をおおうほどの過ちを犯しているという意味かとおもう。

此の風繩雪井ということは、私も我が身の上にその通りであると思つてゐる。昭和四十六年を以て数え年の八十三に達する私が、今まで自分のして來たことをぶりかえて見れば実際風繩雪井の八十三年である。著書を七十あまりも出しているが、皆ろくでもない書き集めである。その他国家社会に真にためになることは何もしていない。

少年時代にはなかなか殊勝な考を持っていたようである

近江聖人と言われる中江藤樹先生のようになりたいと思つ

たこともある。村井弦斎著「近江聖人」という本を読んで感激したのである。青年時代には更に色々の理想を懷いていた。諸葛孔明に感激したり、蘇峰さんの「吉田松陰」を読んで松陰を慕つたり、日蓮上人の御遺文を読んで感じたり、論語を読んで孝道を教えられ、キリストの山上の垂訓(すいくん)に深く感じて読んだりしたものである。

自分の専門が教育学ということになつてペスタロツチを崇拜するようになったのは三十四五歳の頃からであったかと思う。三十歳を越えてからはペスタロツチ研究やプロトの対話篇を読むことに心が集注していたが、二十六歳の夏から近角常觀先生の御導きで親鸞聖人の教に生きる身となつていた。

ところが三十台の私は自分が信仰に入ったということを鼻にかけて、近角先生の口まねをして、色々の人々に宗教論をしけけ、信仰の論理とでもいう口調で相手をやりこめて痛快がるという有様になり、一種の高慢狂のような有様であった。その頃まだ生きていた父が、或る時心配そうなたまらぬようになつて来て、その苦しみのいのちの底からかすかにお念仏申している。お念仏で精神を静めるといふではない。ただ苦しみの中のお念仏である。しかもそこにほつと一息するという心持が湧いて来る。生活のどん底に落ちている此の私をどこどこまで見すてないといふ仏のお慈悲が私の知らない間に私のいのちの底に徹して來るのである。

こんな心持の裡に今までの生活を考えて見ると、本当に風繩雪井八十年である。藤樹先生の孝道については、三万台になつて藤樹先生全集を読むようになつてから深く感じたが、私は全く親不孝の者であるということを、親を亡くしてからしみじみと感ずるようになり、唯今八十の老齢となつては、その感じが深刻になつて、若い時にはそれほどに思わなかつたことが非常な親不孝のことであつたと感じている。父が一心に楽しんで菊花を育ててゐるのを、浅薄な心から批評したりしたことなど、今にして思えば言語道斷のことであつた。

諸葛孔明に感激しても、私の心は人生意氣に感ずといふことの徹底は出来ず、私の出所進退は一時の感情に支配されることばかりが多かつた。勿論吉田松陰のよくな強い生き方は出来ず、弱い陰性を帶びた人間として今日まで生きて来ている。日蓮上人の足もとに及ぶことは出来ない。

併しその雑用の間に私は今までの七十年を静かにぶりかえるようになつて來た。物質生活も精神生活もせつなくて追われて過ごすようになつた。

併しその間に私は今までの七十年を静かにぶりかえるようになつて來た。物質生活も精神生活もせつなくて追われて過ごすようになつた。

キリストの山上の垂訓に笞打たれても、私はそれを裏切るような生活を続けて来て居る。論語は老年の今日まで折にふれて読んでいるが、いわゆる「論語読みの論語知らず」であって、孔子の教の片はしばかりにも副（そ）うこととは出来ない。

ペスターには三十四五歳の頃から十年ばかり打込んでその教育精神を求めたが、結局は少しばかりその人を知り、その人に感じたということに止まり、その偉大な行実に学ぶということは少しもなかつた。研究に終止する一学年に過ぎない。プラトンからソクラテスに心が向つて、四十歳を越えた頃に熱心にソクラテスのことをしらべて見たがこれも私などが近づくことも出来ない強い明朗な人ということがわかつて、私は依然たる、もとの阿蒙（あもう）である。

此のようにして私が二十歳以後に研究したり讃仰したりしてきただことがすべて風縄雪井となつてゐる。一つも身についていない、思えば淋しいことである。

此のようないくつかの聖人の教より外には身の落着けどころが無い。父に対しても不肖の子であり、母に対しては甘えつ子に過ぎなかつた私は、我が子の父としてはまた父らしくない父である。子供らが幼少の時にはそれでも童話をきかせてやつたこともあるが、今となつては家庭における

いられない。

人間は若い時に駄目であつても、老境に入れば次第に円熟して来て、実になつかしい人となるというのが普通の人生の歩みであろう。若い時の乱暴者が老年には好々爺となることもある。然るに私は老年になつても駄目である。

「カラマゾフの兄弟」を読んでフョードルというおやじを実際に最も嫌な人間と感ずるのであるが、私は自分の姿の一面が此のフョードルに似ているのではないかと思って心の底深く淋しくなることがある。

「過犯天に弥る」という言葉が決して誇張の言でなく、今の私が正にそのとおりであると思う。若い時から積んで来た業がつもつもつてゐる。それに過去久遠の宿業といふものがある。その宿業を今の私は痛切に感ずる。人間らしくないから涙も出ないが、胸の底の底に何とも言えない痛切な淋しさがあり悲しみがある。そして「そくばくの業を持ちける身にてありけるを助けんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と仰せられる聖人のお言葉が私の胸にひびいて来る。そこに念佛がある。そして「大悲の願船に乗じて光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かに衆禍の波転す」というお言葉が、五十歳以後の私には身に感ぜられるようになつてゐる。

「過犯天に弥る」ということをいよいよ我が身の上に感

る私はいよいよ沈黙の存在である。少しも人間らしくない。人間に親しみたいという心はある。併しその術を知らない。子供らと一緒に夕食の膳に座つても、殆んど何の面白い話も出来ずに黙つて食事をすましてしまう。つくづく自分がなきなくなる。

それかと思うと、他所へ行つては講話をしたり、座談の席で無用なことまで饒舌つたりする。自分というものがわからない存在である。信仰問題については三十台の私は得意になつて、教育と宗教ということを論じたりしていたが五十台になると自分は信仰があるのでと言えたものではないという心境になつて來た。ただしめじみと我がいのちの奥底まで染みとおる仏陀のまことだけは否定出来ない。親鸞聖人への親しみのはじめは信の巻にある左のお言葉であった。

誠に知んぬ、悲しきかな愚鈍鸞、愛欲の廣海に沈没し名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快（たのし）まず、恥ずべし傷む可し矣。

歎異抄も五十余年來心讀している。而して此の五十余年來の私自身をぶりかえつて見れば、三十台を中心として愛欲煩惱の此の身、名譽心や虚榮心や傲慢心のかたまりであつて、不孝であり不慈である自分をしみじみと感ぜずには

じながら、聖人のお念佛の教に救われて行く。これが今日の私の有様である。（昭和四十五年十二月十三日稿）

聖 語 抄

愚かなる凡夫は、みずから老いるものにして、いまだ老いをまぬがれることを知らないのに、他人の老い衰えたるを見ると、おのれのことは打ち忘れて恥じ嫌う。

わたしもまた、老ゆべきものである。いまだ老いを免れることを知らぬ。わたしもまた老ゆべきものにして、いまだ老いを免れることを知らないのに、他人の老い衰えたるを見て、厭い嫌つてよいものであろうか。これは私にふさわしいことではない。……比丘たちよ、私は、かように考えたとき、わたしの青春の橋逸（たかぶり）はことごとく断たれてしまった。

病についても、死についてもおなじである。病なねばならぬ身でありながら、また死なねばならぬこの身でありながら、そのおのれのことは忘れ果てて、他人の病めるを見つめ、眉をひそめ、他人の死をみては眼をそらせる。それは決してふさわしいことではないのだと気づいた時、わたしの健康の橋逸はことごとく断たれ、わたくしの生の橋逸はみじんに辟けた。（中阿含經、二十九、柔軟經）

信仰と科学

和才誠司

友人に自然学者があつて、親しく交っている。私と話がよくあうので、逢えば必ず何かを語り合う。友人は真摯な学者であるから、見聞が広くて話題が多い。

自然学者の友人は、宇宙の森羅萬象をすべて科学的に見ている。

例えば「国家の盛衰興亡は、季節の変化と同様に、自然の法則によって推移する自然現象であり、生死は自然の法則に依り、人はみな死ぬるが、また自然に生れ、生物は地上から永遠に絶滅せぬ。宇宙はこの自然現象を永遠に繰り返しているのだ」という。

科学家であるから、靈の存在は認めぬ。

友人は國家、社会、政治、經濟、教育、宗教等あらゆる問題につき、学者として辛辣に批判する。議論の趣旨は徹底しているが、言うことが単なる説明議論にとどまり、自己を忘れ、常に第三者の立場にて論ずる点に、私は納得出来ぬ。

社会問題について言えば、友人は今日の社会の欠点をき

と。自ら死を肯定し、死を遠方に眺め、恰も他人の事のように、自分自身を死の闇外に置いて論評するが、死ぬるのは他人でなく、私が死ぬるのである。何故に死ぬのであるかの疑問でなく、私は死ぬのが嫌いである、私だけではなく人はみな死ぬる事を、よく承知しているが、理屈はよくわかつているが、死は嫌いである。屍体解剖によりて死因の真相はよくわかるが、死を嫌う私の気持はすこしも変わらない。

友人は「死は宇宙自然の法則であるから、これに隨順すべきである、これが人間の修養である。泰然自若として死を待つべきである」と言う。

悲しきかな、私にはそれが出来ぬ。かつて一善もなき愚痴矇昧（ぐちもうまい）な私は、生の從来する所、死の趣向する所を知らぬから、独り來り、独り去つて逝く、唯独りで連れのないのが淋しい。

ここに於いて思うことは、学者の知識理論は抽象的にて一応の常識を主張するのみ。己の身に着いていない。その内容がない、真相に触れていない、現実からかけ離れている。

自分自身を問題として取り上げてこそ、初めて信仰問題となるのである。

祖師聖人が「親鸞におきてはただ念佛して弥陀にたすけ

びしく痛罵する。実状はまさにその通りである。

千載の昔、源信僧都は往生要集をあらわして、地獄の姿を詳しく懇切に説かれたが、昭和元禄の今は、毎日テレビ新聞など報導機関を通じ、人間の欠点、地獄行きの姿、社会の真相を刻明に、いやという程見せつけられ、聞かされて

いる。

けれども私自身その社会の一員であるから、その責任はまぬかれぬ。私はこれを如何にして果たすべきや、單に他人を罵るばかりでは解決出来ぬ。ましてや私自身、その濁れる世の中にて、人並以上のわがまま勝手を振舞つて、いるのだから、私をこの社会から切り離すことは出来ぬ。

涅槃經に「人生は慚愧をもって莊嚴する。慚愧なきを畜生とす、慚愧あるが故に父母兄弟あり」と示されている。互に罵り合っているのは畜生道に墜ちているのである。お互に慚愧し合い、たすけ合つて、人生を莊嚴するより外に解決の道はないのであるまいか。

死の問題につき友人は言う。「人は当然死ぬるものだ」

られまいらずべしとよき人の仰せを被りて信ずる外に別子細なきなり」と仰せられ、善導大師も「自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、常に没し、常に流转して出離の縁あることなき身と知れ」と仰せられ、私の問題、私の現実、私の本質、人間の真相を離れて信仰はない

。信仰は知識にあらず、學問にあらず、自己は如何なるものぞ、自己は現在如何なる場に立たされてあるかと、自分自身と取組み、南無阿彌陀仏のおいわれを体験することである。

信仰は知識、學問では解決出来ぬが、信仰は人生如何なる難問をも解決する、絶対無碍の一道である。

歎異鈔に「念佛者は無碍の一道なり。そのいわれいかんとならば、信心の行者には、天神地祇も敬状し魔界外道も障礙することなし、罪惡も業報を感じることあたはず、諸善もおよぶことなきゆえなり」と示され、如何なる惡にも妨げられず、いかなる善もかなわぬ、絶対の大道であることを明かにせられてある。

学者は學問を、私は信仰を生命としているから、学者と私の考え方の違いは此處にある。

人生には物と心との両面があり、物を主とする科学は、生活に欠くことの出来ぬ大切なものである。けれども世の中には巨萬の富を抱いて悩めるもの、無一物にて感謝して

いるものあり、物に恵まれた人必ず幸福、物に恵まれざる人必ず不幸と断定出来ぬから、物質萬能におちいらす、物心両面を能く検討すべきである。単に科学一方のみ偏する事なく、心の眼を開いて心の世界を見るべきである。

法友、大分県南海部郡直川村後藤要太郎君はありがたい真宗信者で、信仰と科学とを調和し、普偏的な眞実の大道を実践した畏敬の友である。

君は眼科専門の医学博士で、多年医学界に活躍していたが不幸にして晩年失明した。世に稀なる眼科の名医が自分自身失明するなど、常識では考えられないことであるが事実である。このため眼科の研究を更に深め学界に貢献すると共に、病を縁として、かねての信仰を益々篤くした。失明後健康を害し老病を併發して、先日（昭和四十五年十一月二十四日）八十六歳の高齢にて、安らかに念佛の息絶えおわられた。

生前、病床を見舞つたが、病のことは何も彼も知り尽している名医であるから、私は病氣を慰める言葉が出ず、ただお互にお慈悲を語り合うのみであった。病気について知識のとほしい私が、不治の難病に犯された場合、医師から経過がよいと慰められると、或は全快するのではないかと喜ぶ心も起るであろうが、名医後藤君にはその喜びは全くない。静かに自己の死を見つめ、永い間不治の病と闘つた

懊惱苦痛は私には想像できぬ。
いたわしき病床から、数々のなまなましき体験、喜びを分けで頂き、ありがたき極みである。

信仰と科学とは対立するものにあらず、後藤君は信仰の中に科学を生かされた。

以上の大如く私は善き友に恵まれ、科学者からは生活の知識を与えられ、法友からは法味を体験することが出来て仕事である。

たとい主義主張は違つても、心の通う友人から得た教訓はありがたい、頑迷固陋の私を今日まで育てて貰つた友情に心の底から頭が下る。

私は信仰と科学と言う大問題を語る資格は全くない、無学文盲であるが故に、何者にも拘泥されず、学者の友人を通じ、私なりに、ありのままの気持を卒直に主張したに過ぎぬ。
人はそれぞれ宿世の因縁が違う。科学を主張する友人は今日科学に恵まれているが、宿世の時、仏縁が薄つかたのであるまいか。信仰に生かされる私は、幸い仏縁のあつたお蔭と、遠く宿縁を信じて慶んでいる。以上。

（四十五年十一月十三日、稿了）

有縁の知識

(一)

松本解雄

が、易行道は成仏の道としては文字通り易行ではあるが、そこには一大難関が横たわっている。

即ち正信偈に「信楽を受持すること甚だ以て難し、難中の難、これに過ぎたるは無し」とあり、和讃に「一代諸教の信よりも、弘願の信楽なおかたし、難中之難とときたまい、無過斯難とのべたまう」と示されている。

一体これはどうしたことであろうか。「陸路の歩行は則ち苦しく、水道の乗船は則ち樂しきが如し」とあるのに、「難中之難無過斯」とは、まさに「羊頭をかかげて狗肉を売る」のたぐい「看板にいつわりあり」と申さねばならぬ。しかし私共は、仏説のまことなること、そして七高僧の伝統と親鸞聖人のみ教えを最も正しいと信じ、そこに私共の眞実に生かされる道ありとひたすらに求道の旅を続けてきたのである。それなのに今ここにいたつて「難中之難無過斯」とは、折角樂園の入口まで案内されながら、今一步というところで突き放され、見捨てられ、さてどこから

ところがこの易行道たるや、その名を表面的に受取つて「やれやれ」と腰をおろそうとしても、どっこい、そんなに簡単に問屋は卸してくれない。前にも述べたことと思う

人必らず不幸と断定出来ぬから、物質萬能におちいらす、物心両面を能く検討すべきである。単に科学一方のみ偏することなく、心の眼を開いて心の世界を見るべきである。

入るのが、うろうろしているような状態であるまい。

以上のこととを如何に解釈したらよいか。以下少しく私見を述べさせて貰うことにする。私は「易行道」と「難中之難無過斯」とは決して矛盾しないと思う。なるほど表面的に卒爾に読めば、両者は相容れない真反対のことを述べているようであるが、それを体験上から味読すれば、決して矛盾しない。否、どちらも眞実であり、仏陀の絶対の智慧と慈悲との具体化に他ならないのである。即ち末法時代に生まれ、しかも鈍根なわれらは「いざれの行もおよびたき」身であるから、前述のように、どうしても他力易行道によるほかない。しかも他力、仏力なるが故に「凡愚底下の罪人」であり、「無眼人、無耳人」でありながら「智慧の念佛」をうることによつて、「信心の智慧」をたまわることによつて、「弥陀の誓願不思議にたすけられる」のである。他力の救済は全く人間のはからいを越えているのである。

以上のことからして、私共は一応他力の救済の筋道はわかつたような気がする。しかしそれはすべての医師から見放された重病人が、難治の病氣をなす秘薬の存在をきいて、病氣がなおるような気がするとの同様である。問題は現実に病氣がなおることでなければならぬ。そのためにはどうしても「有縁の知識」との出合いが必要である。

一 道 会 の 記

榦 原 德 草

十月二十五日午後一時十五分、今年の一一道会が開催された。一時からの予定が少し遅れたのは、京洛の秋の行楽客で乗物が混雑して先生方の姿が定刻までに見えなかつたからであるが、ここ淨住寺は静かな別天地である。雑聞を遙かに離れた淨域の法城である。先師の鎮まります『ただ念佛して——たのもしさ——』の催される法湧の道場である。

今年は先師の三十三回忌、もう三十三年も経つてしまつたのかと、ひとしお追憶の情が募る一道会である。「温容は寂滅の煙りと化し」ても、先師より面授口訣（めんじゆくけつ）の実語『ただ念佛して——たのもしさ——』の眞実無碍の一道は脈々として此處に流れ輝きを増すばかりである。私は七十の齡を重ねたが今年もこうしてこの会に遭うことが出来た、何とした幸慶であろう。先師が晩年に仰言つた『……ただ念佛のみぞ残れり』のお言葉がいよいよ身にしみわたつて味嘗（みしよう）される。法爾（ほうに）として十方に光耀し古今まで貫徹する無碍の白道であ

そこを唯円坊は「幸に有縁の知識に依らずんば、いかでが易行の一門に入ることを得んや」と歎異抄の序文で述べているのである。「有縁の知識」をわかりやすく「なくしてはならない先達」と言つてもよいと思う。はからいに満ちた私共に、如來の眞実を知らしめるためには、なくてはならない先達」、先生、ここに他力信仰への重要な鍵があるので確信する。

四十六年初春稿す。

歌 集 「遊 林」

筑紫野 春 草

童形の厩戸

童

形

童形の厩戸（うまやど）皇子もろ掌（て）合せひざまづきませり赤き襟着けて

山の端ゆ出づる月光にもろ掌合せ南無仏と称へ居ますところか

あはれこの童形の皇子何人の作なる知らずただただ見呆く

老 懶（ろうらい）

眉ひそめ聞かねばならぬこと多し先輩の老患 知人の事故死

相すみませんと汝にもあらぬこの一語老懶のわが心明るくす

る。よくもこの会に今年も遭ひつる哉である。
名号碑の前に菊花を、容殿の先師の御尊影の前には先師のお好きだったばらの花を捧げた。碑の周辺のこれまた先師のお好きな萩の花は既に終りである。一道会は私の寺の報恩講のようなもので、先師に直接に或は間接に導かれた人々が遠く近くこの日の来るのを待つて集る会であつて先師の念佛の徳の御催しで自然に出来た集いである。

先師がかつて岡崎親鸞会の時、それは春であったが、会場の岡崎城趾の巽閣（たつみかく）での講話で開口一番「雨は降る／岡崎の城に、花を催す雨が降る」と仰つたが、此處もまた如來の慈育により先師の恩徳の法雨によつて、本当に念佛の花を催して下さる一道会である。
花田先生も病軀をおして名古屋から来られ、松本先生は高松から、そして今年は二十年目に幸に身体の調子がよいのでと富山から長谷顯性先生が参つて下さった。川畠夢義先生は朝から電話連絡して下さる。今年も亦、長崎から松本氏が五、六人の人々と参会して下され、神奈川、四日

市、東京、四国などの人々、御名前も知らぬ方々が続々参集されて、五六十人の多数にのぼった。

例によつて私の導師によつて阿弥陀経、世びに歎異鈔前十章を拝読し、その間、皆さんは御焼香される。何時ものことながら私は歎異鈔の序文の「……幸に有縁の知識に依らずんば、いかでか易行の一門に入るを得んや……」の所で息がつまる。まことに有縁の知識によらなければ、である。「よきひと」に会わなかつたならば、である。この地獄必定の身であり、煩惱具足の身であり。何れの行も及び難き身であると、どうして知ることができよう。この身の真相（ますがた）を知り、この身のための御慈悲を知る、ただ念佛して阿弥陀にたすけられよ、との仰せのままに無碍の一道そのものにならせていただけるのは、本当に「よきひと」「有縁の知識」の御かけである。

しかもよきひとは自分の計らいで探し求めて得られるものでなく、よき人にお会い出来たのは、如來の遠く深い善巧方便のたまものである。だから「阿弥陀の誓願不思議にたすけられまいらす」外はない。

さて、先生方の御法味と、その前に私の述べた大略を次に誌す、私の話は次の通りである。

池山先生にドイツ語を学んだ、昔の六高卒業生で、毎年

池山先生にお目にかかれたのは嬉しい極みです。一道会が御無事に執行されますようお祈り申ます」

永井先生が激病の病床の中から「これだけ文字を書くのも脇痛や腰、腹等にギリギリ切込む痛みが来ます、十月十三日夜」と結んであります。ここに永井さんと池山先生の深く遠くはるかな御念佛の因縁の熟して行く姿を驚きと共に有難く拝しました。

この他、不参のための御供花料や病床にあつてその日をお念佛裡に偲ぶという御便りなど頂いております。

本日の一道会は先生の三十三回忌であります。ここに掲げてある先生の御軸、「親鸞もこの不審ありつるに唯円房同じ心にてありけり」は、昭和十一年の御筆です。先生が聖人の筆跡を慕つて運筆を聖人に模して書いておられるそのおこころが胸に迫ってきます。それから次の「親鸞においてはただ念佛して」の御軸は聖人の筆意が先生の内に渾然融合して一つになつた感が深く迫ってきます。「南無阿彌陀仏」の御名号は、これはかつて岡崎の親鸞会に御出講下さった時、先生が和服に着かえられて、やおら坐につかれて落着かれた時、かねて用意しておいた墨、筆、紙を先生の前に出して、岡崎親鸞会のために御名号をお願いしたもので、私共二三人がそれを拝見していたのですが「南無阿彌」の字まで書かれると阿彌の字の作りの方は墨が

夏にここへお詣りされる小児学会の元老、札幌市の永井夫先生が、何時も先生の徳を慕われている。昨夏のことだ

ったか、名号碑の前でお別れのとき、榎原さん私はお念佛が出ないんで困るんですよ、と笑いながら云われたことがあった。それで私は、永井さんそれはお念佛があなたに満ちているからですよ、溢れるように念佛があなたにたまると口に念佛が出るようになりますよ、と云つたら、参つた参つた、と云つてお別れしたことでした。その永井先生に案内したら、昨年十月から突如として身体中を粟のいがが走り廻るような業病にかかるて激痛と、毎日鬱病の生活をしているとのことですが、その返信の中に、

「何共ドキツとする様な奇遇、先日来、現状をお知らせしようと思ひ頭から離れなかつた所が、昨十二日払暁、マザマザと池山先生の夢を見ました。お召物も羽織も袴もすべて黒づくしで端坐して居られ、まだ壯年より少し前の小生が先生の前にかしこまつて、私の今日あるは先生の御蔭と御札を申上げたら、何と先生は例の温容に笑みをたたえられ、イヤイヤ僕の失意の時に僕を救つてくれたのは君だよ、と仰せられるので、僕が恐縮して居るという夢をみた

その十二日の晩に夢を見たその日に一道会の案内状がとどいた。僕も科学人として夢見がどうのこうのと云うような事は平生問題にしない方だけれど、こんなにはつきりと

かすれで早く墨をつがれるといいがと氣があせつた時、横の硯にさつと筆を染めて一気に「陀仏」と書き終られましたこうして文章に書くと長いのですが、実は眼をこする程の早さでサッと書きあげられ、私共は呆然と溜息をつくのも暫くしてからで、先生は「これでも計らいすめで」と申され、またしても私共はお念佛させられることになりました。この御名号を拝すると、去る日の先生のその場の御姿とお念佛が眼前に髪髪と浮んでまいります。

先生の御写真とその右は近角先生の御写真です。両先生は私の生れた明治三十三年にベルリンで初めて釈尊の花祭を催されました。それが現在でも統いて催されておりますが、大戦後山田宰先生が池山先生のドイツ語訳の歎異鈔をもって行かれて有縁の方々に講述せられたところ、その御縁からベルリン真宗協会ができ、主宰者ピーパーさんが真剣な歩みを続けております。白井先生にピーパーさんが手紙をよこしましたが、ナムアミダブツで文を結んであつたことを思い出します。七十年も昔に播かれた花祭の仏縁が、南無阿彌陀仏と咲き出でていますことは、仏のまことは金剛不壞であると知らされます。

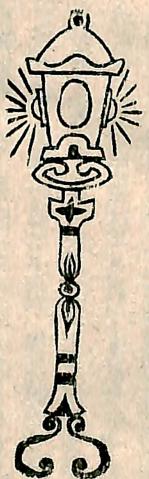
さて先生から頂いた『仏と人』の御著書はこれです。末尾の余白に「池山先生からいただく、昭和十二年七月十一

日、徳草」と、謹厳に幼稚にかいた私の字があります。嬉しくて有難くてかたくなつて下手に書いてあるのがなつかしい記念です。

この年の十月に日支事変第二回目の大動員で私は招集され、先生にもお知らせして急ぎ京都駅に赤だすき姿で集りました時、先生の奥様が駅にかけつけられて申されるには先生は昨夜、近角先生の御子息と私と二人の応召の通知を受けて一夜中、輾転反側一睡もされなかつたようですがのこと。私は常々の先生の姿には、あゝそでずか、南無阿弥陀仏、と仰言る外に見たことのない深い慈悲のお心がそうであつたのかと涙の流れるのを止め得ませんでした。

先生一門の者共は、誰でもが自分が一番先生に可愛がつて貰つているんだ、と胸を張り腕をひろげて宣告したものである。誰もがそう感じてゐるのが眞実です。でもその中でも最も愛し慈しんで下さつたんだと信じています。然しそう信じる心をよく／＼顧みれば、門下一同の中でも特に罪の深い業にさいなまされている苦悩の私故であつたからであると思うと「ただ念佛して」の先生は唯一無二の私一人の先生でありました。

戦地に在つた弾丸雨飛の間、鉄兜で伏せの軍装の手に親鸞会から慰問の手紙、一枚の寄書きを開いた時に、中央に「我能護汝」の四字がクッキリと先生の筆跡が認められた



「ただ念佛して」

花田正夫

弥陀の本誓願、

極楽の要門に逢えり

『親鸞』におきては「ただ念佛して弥陀にたすけられまいらすべし」とよきひととの仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」

歎異鈔二章のこの一句は、真宗の流れを汲む人々の常に耳にし、口にくりかえす言葉であるが、その源は、弥陀の本願に発し、釈尊の説教とあらわれ、やがて善導大師の了解（りようげ）となり、法然上人と承け継がれ、親鸞聖人、正信念仏と、伝承せられたままを提唱されたことがある。

善導大師は、称名念佛、法然上人は、専修念佛、親鸞聖人は、正信念仏と、伝承せられたままを提唱されたことがそのままを受けとめられた仏のまことのいのちの流れである。善導大師は、称名念佛、法然上人は、専修念佛、親鸞聖人は、正信念仏と、伝承せられたままを提唱されたことがよく知られているが、まずその流れをたどつて見よう。

称名念佛
善導大師は『帰三宝偈』に

我等愚痴の身にして

曠劫よりこのかた流转せり

今、釈迦仏の末法の遺跡（ゆいしやく）

とき、弾丸の中を腹ばいになつていた私は、「よし、御国のために死んでやろう」と決意したことでした。どんな死に方をしてもそこに先生とお念佛がついている。その広大無辺の安らぎと悦びとそして決意とは今も忘れられません

『仏と人』の裏の余白には、もう一つ、先生の御葬式の新聞廣告の切り抜きがはつてあります。「父池山栄吉儀、予而病氣療養中ノ處、十一月八日午后三時十九分、死去致候ニ付此段謹告仕候。追而来ル十二日午后二時ヨリ四時迄ノ間、京都市東本願寺前停留所一丁東入ル重信会館三於テ告別式相當可申候云々。昭和十三年十一月十日、男池山寿夫、親族総代村上鶴一、友人総代近角常觀」

先生の御葬式の日が目に浮ぶ。帰りに小雨の降る中を誰も彼も黙々と歩む。どこかのそば屋で寒さ凌ぎに数人してそばを黙つてすつた。音を立てるそばだけが生きてるようだったあの日のことが思い出される。

又、観經疏（かんぎようそ）の散善義（さんぜんぎ）のも、幸に釈尊の教説に導かれて、弥陀の本願を聞き、極楽に生れるかなめを信することが出来たと喜ばれている。

決定して深く、自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し、常に流转して、出離の縁あること無しと信ず。

と、遠い昔から、現在も、そしてこれからさきも、迷いの境界から出離するよがの絶えて無い身であると、決定して深く信すると、自身を慚愧せられている。

大師はここに観経の中で極重惡人の救われるところに着眼せられて、称名念佛の道こそ、弥陀如來の大慈悲の至極

であり、そこに我身の救いがあると随喜せられたのである。さて下根の愚人とは、十惡、五逆の罪を重ね、僧物をぬすみ、正法を誇るなどあらゆる悪を犯しながら、いまだかつて慚愧したこともなく、その当然の身のなるはてとして臨終には、苦悩が雲のように集り、地獄の猛火が眼前に燃えるという有様である。

善知識はこれを憐み、弥陀仏の御徳の広大無辺にましますこと等を説いて聞かしますが、頻死の愚人は、病苦と罪苦がせめて、心は苦しい／＼ばかりで、仏の徳を心に念ずることも出来ませんと訴える。この時、善知識は

「汝、若し念すること能わんば、まさに無量寿仏を称すべし」

と、切々と勧め、この罪人も、念佛十遍してやがて浄土に迎えられるのである。

大師は、そこに、御自身をはじめ、一切の愚人、悪人の救濟の光を見出されて、弥陀仏の一切衆生救濟の御本意を、随喜せられたのである。そのこころを、「若し我成仏せんに、十方の衆生、我が名号を称して、下十声に至らん。若し生れれば正覚を取らじ。彼の仏今現在成仏したまえり。まさにしるべし本誓重願（ほんぜいじゆうがん）虚（むな）しからず。衆生称念すれば、必ず往生を得るなり」

「すでに余が如きは三學（戒・定・慧）の器ものにあらず。この三學の外にわが心に相応する法門ありや、わが身にたえたる修行や、あると、よろずの智者に求め、もろもろの学者とぶらりしに、教ゆる人もなく、しめすともがらもなし」

の悲歎に沈まれたのである。

幸に、黒谷の報恩藏で、善導大師の勧化の書にあい、凡夫往生の道ありと知って、身の毛もよだつ喜びの中に、繰り返して八返詠またとき、「一心に弥陀の名号を専念して、行住坐臥、時節の久近を問わず、念々に捨てざれば、是れを正定の業と名づく彼の仏願に順するが故に」

「余がごとき下機の行法は、阿弥陀仏、法藏因位の昔かねて定めおかるるをや」と、高声に唱えて、落涙千行万行の中に、念佛門に帰入せられたのである。この法然上人の体験から、有名な三選の文が述べられたのである。

「それ速かに生死を離れんと欲せば、二種の勝法の中にしばらく聖道をさしおきて、選んで淨土門に入れ、淨土門に入らんと欲せば、正雜二行の中、しばらく諸の雜行をなげうちて、選んで正行に帰すべし。正行を修せんと

と、本願の正意、称名念佛にありと、大經成就文と觀経から、仏意をそのままに開顯されたのである。世に有名な「十八願加減（かげん）の文」といわれるものである。

その頃の支那の淨土教の人々は、觀念（かんねん）の念佛を重んじて称名念佛を軽んじ、権化（こんけ）の人は称

名一つで眞実の淨土に参れるが、罪の重い凡夫が称名したのでは、極く僅かな淨土の縁が結ばれるにすぎないと主張し、凡愚人の救濟の道はふさがっていたのである。

大師はひとり、深く觀経を読み破って、觀経でイダイケ夫人が救われているが、夫人は決して権化の人ではなく、愚痴の女人、愚惡の凡夫であると、經の隨所をあげて證明し、この凡夫が、称名一つで眞実の淨土に生れたことを発表し、世間にすすめられたのである。

このようにして、大師は大無量壽經では本願の眞実を仰がれ、觀經では、その本願のお目あてを、愚人凡夫にありと隨喜せられたのであるが法然上人はこの「十八願加減の文」を、御自身の真影に書き入れて親鸞聖人に渡されている、誠に仰ぐべく信すべきかなめの御文である。

專修念佛

法然上人は、十五の時叡山に登り、四十三まで修学修行の甲斐もなく、

欲（ねが）わば、正助一業の中に、助業を傍らにして、選びてまさに正定を専らにすべし。正定の業とは即ち是仏の名を称するなり。称名は必ず生まるを得るなり。仏の本願によるが故に」

と、上人畢生（ひつせい）の著、選択集に專修念佛を勧めて下さっている。聖道門をさしおき、雜行をなげうち助業を傍らにして、称名念佛せよ、これが弥陀仏の本願に順ずる道であるから、間違なく往生させて頂ける道である、とのことである。

御臨末の書、一枚起請文（いちまいきしょもん）に「もろこしわが朝のもろもろの智者達の申さるる觀念の念にもあらず、また學文して念のこころをさとりて申す念佛にもあらず。ただ往生極樂のためには南無阿彌陀仏と申せば、疑いなく往生するぞと思ひとりて申す外に別の子細なきなり」と、滅後の異義邪義に迷わされぬよう、愛弟子にこの起請文をのこされたのである。

正信念佛

親鸞聖人は、九歳に出家、廿九歳までの努力も空しく、

「定水（じようすい）」をこらすといえども識浪（しきろう）しきりにうごき、心月（しんげつ）を観せんとすれど

も妄雲なお覆う」と、いずれの行も及び難き身を抱えて、吉水の禪坊に法然上人をたずねられたのである。この時すでに六十九歳の円熟された上人は、御自身の体験を語られるとともに、弥陀如来がすでに凡夫のわれらを知るしめされてこの者のために選択本願の念仏をたまわっていることを、微に入り細にわたって口伝せられたのであった。

曠劫多生のあいだにも出離の強縁知らざりき本師源空いまさすばこのたび空しくすぎなまし真の知識にあうことは難きがなかになおかたし、流転輪廻のきわなきは疑情のさわりにしくぞなきと、恩師の化導を渴仰せられ、更に、

智慧光のちからより 本師源空あらわれて

淨土真宗をひらきつつ 選択本願のべたもうと、恩師の上に仮智の権化である勢至菩薩の智慧光と、弥陀仏の慈光を拝しては「たとい法然上人にはかされまいらせて地獄におちたりとも後悔すべからず候」と述懐せられた。その聖人が恩師から聞きとられた至極は、「ただ念佛して弥陀にたすけられまいらすべし」であった。いずれの行にても生死をはなることあるべからざる、地獄一定の身を悲憐されるお慈悲のお念佛をいたくばかりであり、弥陀にたすけられるばかりで、別の子細はないとの思召しである。

にしみてひらける大信心である。
以上のように教の真意は、水も漏らさぬ周到さの中に聖人によって明らかにせられたけれど、一般にそのこころが普及していかつたため、聖人の滅後は、信をとりおとした念佛の勧めに多くの人々がなびいていた。中興の祖、蓮如上人が「聖人一流の御勧化のおもむきは、信心をもつて本とせられ候」と提唱せられ、更に「当流の念佛は、弥陀のむが念佛なり」と、無信の称名と水際立つて分けられたのである、ここに信心為本（いほん）の宗風に隨喜する道が一般の人々にひらかれたのである。

選択本願の念佛が、称名念佛とあらわれ、専修念佛と相承（そうじよう）され、そのままを正信念仏とうけとめて下さった御告白が、

「親鸞におきては、ただ念佛して弥陀にたすけられまい、らすべしとよき人の仰せをこうもりて信ずるほかに別子細なきなり」

である。淵源を弥陀仏の大願海に発し、三国七祖に相承され、聖人によって顕彰された、生きた念佛のまことを今日聞きまつることの出来る御恩、遠く深く謝しまつばかりである。

ただここで、現時点にあって反省をせねばならぬこと

この、別に子細のない念佛に子細をつけるところに異義が生じる、眞実の親にめぐり会うた迷い兒は、そこにやらぎ、そこに満足する。あれこれとはからうのはいまだ親にあえない者の悲しいあがきである。法然上人の滅後の念佛者の中に種々な異義があらわれて、恩師の真意が埋もれようとしているのを見られる親鸞聖人は、淨土真実の教行信証の顯彰（けんしよう）に生涯を打ちこまれたのである。その中で最も大切に説かれたのが信卷である。阿迦弥陀二尊の思召しのまま、三国七祖の教えに受けたまうた聖人が、親鸞別にめずらしき法をひろめずとの私無きおこころから、自力、我執を根とする雜夾物を峻別せられて、如來からいただく大信心をあきらかにして下さったのである。本願の念佛は如來の成就して下さった大行である。私はかって、万行に対する一行とばかり思つていて、この念佛の一行が最もすぐれているというように聞いていたが、そうではなかつた。仏法で大がつくのは絶対をあらわすので、大小の相対差別を脱した仏力のひとりばたらきをあらわしている。したがつてこの念佛の大行を信受するのも相対差別の我々の分別心では不可能である。我々には信する力もないのである、その信ずる力も行する力もない我々が信界に入らせて頂けるのは、全く仏力のひとりばたらき以外にはない、月の光で月を仰ぐように、仏のおまごとが身外にはない。

は、信心々々と云いながら、念佛をとりおとし勝な点である。信も疑も念佛の地盤の上にあつてのことであるのに、念佛もなくして信を語ることは、観念の空転に終わるばかりである。しかし一部の実際主義者のいうように、信を軽視した念佛はまた不安と焦慮をまぬかれぬであろう。本願の真意を聖人によくよく聞きとらせて頂いて、祖意にそい奉りたいものである。

美の永遠性 高村光太郎
ある一つの芸術作品が永遠性を持つというのは、既に作られたものが、ある個人的觀念を離れてしまつて、まるで無始の太元から存在していて、今後無限に存在するに思えないような特質を持っているからである。
夢殿の觀世音菩薩像は、誰かが作ったという感じを失つてしまつて、まるで天地と共に悠久であるように感ずる。恐らく芸術の究極の境は此處にあるのであろう。

あとがき



ありました。

ずっと以前に、電気工学の研究でベルリン留学中だった山田翠さんが、池山先生の独文歎異抄にもとづいてベルリンで歎異抄を講説しているうちに、ピーパーさんが不思議にお念佛に心ひらけ、現在ではベルリン浄土真宗会を主催して、念佛歩みを続けていることを聞き、今度と同様に言

い知れぬ喜びを覚えたことがありました。ルリン浄土真宗会を主催して、念佛歩みを続けていたことを聞き、今度と同様に言

- 毎月、第一、二、三日曜、午後一時半。
一道会例会。市電、新郊通り一丁目下車。
東へ三筋目、左入る
- 毎月二十四日、午前午后、教西寺法話会。
市電、御器所通り下車。
市バス、北山通り下車。

たまさかに　如来に面す　春の風
これは池山先生の句であります、苦惱の娑婆とは申しながら悲惨なことのみ見聞するこの春、セイロンで修行している留学僧の土岐翠翁君から次の新春のおとずれをうけて、如来に面する感を覚えました。

さて、ピマラさんは英国人でロンドン大学で近代美術を学んでいるうちに家庭の問題に行きつまり、キリスト教に救いを求めたが信を得られず、インドで某長老に開眼せられて比丘となり、タイに渡り、やがてセイロンの上座部の仏教を学んで一年もす

ぎたが、上座部の靜観の法も及び離いことに絶望していた。ところがピマラさんが日本の大乗仏教、ここに歎異抄を読みたいと土岐君に訴えたので、私はその由を京都の渡辺顯信さんにお願いして、英文歎異抄を送りとどけました。それが歳末でしたが、年頭に、土岐君とピマラさんの書信をうけました。そこにピマラ比丘が南方仏教には触れられない仏の大慈悲心を聞き、おどりあがつて念佛申すように転じたとのことで

信します私には、セイロンでおこったこの一事が、大変な出来事と信じられますにつけ、皆様にもお聞き頂きたいあまりに書きました。いずれ詳しく述べ、その後の報告を待ってお知らせいたしましょう。

「信を行く旅人」は、池山先生が住吉時代に、大阪の学生仏教会のために堂ビルで歎異抄の講話をせられたものであります。その出版所の興教書院も廃業となり、絶版のままになつておりますので、その中から抄出させて頂きました。

福島先生、和才様はすでに八旬をお越えになりましたが慈光を護念して下さつて御執筆下さいました。

御案内

定価	半 年	二百五十円（送共）
	一 年	五 百 円（送共）
編集・発行人	花 田 正 夫	
名古屋市南区駒上町二ノ八八		
電話八二一局七〇三七番		
愛知県西加茂郡三好町大字福谷		
印 刷 人 吉 野 穂 志 郎		
名古屋市南区駒上町二ノ八八		
発 行 所 慈 光 社		
振替口座 名古屋一〇四七〇番		
郵便番号 四 五 七		